特54
54

蓮華注生鮮画臺

第十號

木潮花口演
柳葉亭繁彦著
稲野年恒畫

帝國圖書館藏

稟告

此物語い天明の年間下總國葛飾郡關宿の藩士小泉半之丞と安達辨之助の兩人が一婦人の爲ゑ遺恨を含み藩邸の馬驗所ゑ於て武藝の試合と爲せゑ始り半之丞竟ゑ辨之助を討て君侯の氣色と蒙り割腹の命下る時偶々養傳寺の日功和尚參邸して之を救ひ關宿へ伴ひたるのち愛ゑ溺れて鄉左衛門お花を引具し養傳寺に詣る歸路水戸崎ゑて烏山の惡僧天海ゑ砲殺されお花を奪れさる件んより半之丞の養道飯高ゑ來り修行中花實お婆お丑の養女お菊と奸通したる末お丑の一子多九郎關宿の養傳寺を脅迫し金を得んとして却て老僧ゑ說破され更ゑ養道と義を結び朗師の謹彫の靈像を盜を中山の行者と披露し上總國一の宮ゑ於て邂華往生を企て多くの人を欺さしも俠客法華丈助の活眼ゑ見顯され捕縛とある有名の談柄ゑして舌耕師伊東潮花氏の口演あるを柳葉亭先生懇ろお筆記せられ通計拾回限り讀切を成る最面白き稗史なれい御評判御購讀を願ひ上候也

明治十八年八月八日版權免許
明治十九年五月　日發　発
通計十回讀切
定價金

編輯人　東京府士族　中村邦太郎　京橋區鎗屋町十三番地
出版人　東京府平民　森川林三郎　同區南鞘町七番地

大賣捌所
東京日本橋區新芳町十二番地　艮明堂
同　馬喰町三丁目　自由堂
同　蠣殼町壹丁目三番地　信文堂
同　京橋區南傳馬町三丁目　松成堂
横濱太田町三丁目　萬字屋
相州横須賀沙上町　鈴木屋

邂華と作り出し往生を望む者を此裡へ入れ竊ゑ其下へ穴を明け鎗をもて突上るい鮮血少しも散乱せず恰も入寂したる如く見ゑん事疑ひ無らん依て御身是までの經ひを思ひ我爲お鎗役を勤め給へ御身と我のみ絶て人お知るゝ憂ひ無れい世お洩るゝ心配い有まじ然し假ゑも出家たる者の所業ゑ非ずと思さい速ゑ斷り給へ我も又此席限り思ひ止る可しと言聞すゑ殘忍無賴の多九郎何の分別有可き金をさへ得る事なりせい親の首へ繩を付んも物數とは思へぬ物を然斗りの事何迚辭ふ可き委細心得申したりと即坐に承諾しがば養道は深く悅び猶種々お談合せい最惡む可き曲者ありけり恁て養道ハ其翌日我逗留する邂長寺の住持日秋ゑ對面して言やう貧僧素よりさせる才德無れ共幸ひゑ宗祖上人の御蔭に依り世の病者を救ひ禍ひを轉じ福ひを迎ふる加持祈禱を爲ゑ一ッとして過ちたる事無きい既ゑ貴僧も知るゝ事なるが茲に不思義なる事こそ有れ开者余の義ゑ非ず夕邊亥中のころ宗祖上人貧道が夢枕ゑ立て宣ハく汝我宗門に深く歸依し年來夥多の人數を助くる事我に於て甚だ嘉する處なり就ては汝只空蟬の息ある者をのみ救ふを旨と爲るい汝も未だ煩惱の垢を洗濯能はざる物とや云ん惡佛法の廣大なる事を周く世ゑ擴めんと思いゝ汝法力を顯はし云々の堂を設け往生の素懷を遂さす可し恁れい我を信ずる善男女は法華の功力ゑ依り天上に生を引事聊かも疑ひ無き斯てぞ汝が法力は無窮ゑ傳へ雖か尊み仰がざらん勤めよやゝと宣ふかと思へい愕然と我ゑ返りて始めて其無想なりしを知と雖も覺てのちも肉骨動きて今猶目前ゑ在が如し是ゑ依て倩々思ひ見るに五十年の星霜ハ槿花一朝の榮ゑ去て元の卒末の露餌りは壹人免るゝ者有ん然らば後世の營みこそ管要成んゑ今幸ひ宗祖上人の御告も有い貧道法力を顯ハ一往生を望む者に容易く本意を遂さす可う思へり知き貴僧は何と思さるゝよやと忍びやかに云ふゑ此日秋は才も無く德も無き貧僧成ば養道が日來の法力ゑ眼昏み且ハ宗祖上人夢

の御告なりと聞て只管驚嘆あし更に一議よも及ばず同意なしゝよにぞ養道い竊かよ悦び像て多九郎と語らひ曾たる通り大きやか成る唐銅の蓮華を造り新たよ八間四方の家をも出來之と其正面よ備へ一段高き所よ日朗上人の彫刻したる例の尊像を餝り付け用意全く調ひしかゞ更わ多九郎を說て我と同じく出家の姿とあし寄々八方へ赴かしめ今回遵長寺の客僧養道上人宗祖の夢想を蒙り人有て往生を願ふ時い遵華の臺に座せしめ經文讃誦し給へゞ少去も苦去む事なく大往生を遂げ宗祖上人の御導よに依り天上へ生を請ん事努々疑よ處無しと辨舌を盡して說聞かする程よ然ぬだよ宗門よ歸依する處の村翁野嫗い何の思案も無く偏よ

宗祖上人の御導きなりと心得一日も早く天上よ赴き無窮の樂しみを請んものと財と捧げ米穀を齎し來つて往生を望む者一日〳〵と殖ゆくにぞ養道多九等郎い願望思ひのまゝに叶ひ金銀財寶を得る事限り無を悅び後よい右の金銀を見せて萬事と明ー竟よ遵長寺の日秋始め其他の惡法師四五名を味方よ引入れ思ひのまゝよ遵華往生と行ひたるい不敵と云も餘り有り話說舊よ復る茲よ小泉養道よ誠を盡したる彼か菊い雇主船越丈一郎よ口說立られ奈に共成難く身の溥命を歎き鎌倉の山中よて縊れ死なんと爲ー時來合去て助けたる男と云い則ち此一の宮よて世に知れたる俠客法華丈助と云者ありしゞか菊を種々に諫め論し竟よ我止宿する旅籠屋へ伴ひ徐かよ其死あんと爲る顚末を訊問しかゞか菊い養道よ欺かれたる始終丈一郎の惰慾を避ん爲め覺悟を定めたる趣きあゞ涙のひまよ語りけるよゞ素より義氣有る法華丈助大いよお菊が溥命を憐み某しい上總の一の宮よて丈助と呼るゝ者なるが此回些の所用有て小田原へ行たる歸るさ此鎌倉にも用事有て態々來り夫等の事も片付て翌日い古郷へ歸ふんと思ふ處なれゞ御身雖よ便ふん術無ゞ我方わ來り給ひ後御身の指方へ赴き給へ然らゞ茲よて徒らよ死するよは遙優り早晩其養道と云る惡僧よ面會して恨みを陳る時節も有可しと眞實見えて說諭しけれゞお菊は丈助が深切を悅び其意わ任せーゝゞ丈助も言甲斐有と悅び竟よ我家へ伴ひ歸り女房お米わも件んれ始末を斷し夫婦愁ろよ憐みを加へしゆゑお菊い再生の思ひを爲し丈助夫婦を父母の如く朝夕心を込て立働き居たりしとそ然るよ生個丈助或日他行ーて歸り來りお菊を呼て囁くやう偖も今日商法の事に依り其處此處を駈歩行しよ到る處遵華往生の噂高く开者法華の行者にて養道と云る上人なる由然るよ和女が貞節を無よ成し旨く欺きて和女よ辛き目見せたる法師の名も養道と聞たれば若や其奴よは有ざるや御身明日より遵長寺の境内へ小さき小屋を設け參詣人の休を所として其處よ在ゞ自然

と養道ゐ出逢ふ事有可き搏へて油斷給ふなと義ゑ勇む丈助が深切の言葉ゑお菊い太く悦び委細心尚侍りたる仁事能く調へ給ふ可しと云けるゑぞ丈助は其翌日蓮長寺ゑ赴き茶店を設ける旨を云入れ乾兒ゑ命じて早くも一ッの小家を出來此日よりお菊と彼見世番と爲しけるゑ像ても言る如くお菊と元來優れたる美人なれバ參詣の老若も目を側ざてゝ其艶麗なるゑ驚きしとぞ偖お菊は此日を始めゑ毎日此茶店ゐ來つて專ら養道ゑ逢ん事を欲すれ共生憎に便りを得ず心頻りに焦燥て在しゑ或時壹人の出家の急がゝしく我見世先と通り行を何氣なく打見遣バ怪むし可ー件んの法師は我飯高ゑ在つる頃愛目を見せたる花賣お婆ァお丑の一子多九郎ぬれバ驚き呆れたるが要こそ有と忽ち壁振りたて多九郎ぬしにい在さすやこや喃々と呼止めたり

○第廿回

偖も今お菊ゑ呼留られたい則ち多九郎ゑて今い表向養道の弟子と成り名も日托と改めしが思ひ懇無くお菊ゑ廻り合ひ懇く事大方あらぢお菊い又養道の便りを聞出さんと思へば態と馴々敷待遇し飯高ゑて別れたる以後今日ゑ至るまで千般の艱難ゑ逢ひ斯の如く落ぶれて水茶屋の雇ひ女と成りたりなど口から出るまゝゑ欺き賺し竊お養道の實否を尋ぬるとい心も付でや多九郎の日托いお菊ゑ別れ關宿ゑ赴き却つて養道と腹を合せ所々ゑて非道の振舞をおしたる概畧を品能く囁き御身一旦出し扳れたる恨あれ共今養道現在ゑ居れバ對面せまほしと思いゝ某手段を以て容易面會させ申さんと言けるにろお菊は日托の物語りにて蓮華往生の惡計い勿論其餘の事を委ーく聞たれバ一應主個丈助ゑ物語り其上ゑて養道に逢ひ恨みの丈を陳んものと心中ゑ思ひ定め今日い日の暮るゑ間も無く客足も最繁くて寛りと物語りも爲し難けれバ明日妾竊ゑ養道ぬゑの借切居るゝ坐敷へゆき久し振ゑて對面致ー侍らんお其時ころ萬づ御身の庇蔭を仰ぎ參らそるおりと多九郎を賺し歸し自個い直さま見世を片付彼丈助方へ歸り來り今日斗らぢも飯高の多九郎法師日托ゑ面會おし養道が舊來の惡事と今回企てたる蓮華往生も怪ーき討劃わる事など多九郎ゑ聞ゐる通り詳らかゑ物語り恁れバ妾明日養道ゑ對面なし一回成ぢ二回三回欺れゐる恨ゑを陳んと圍敦荒く陳ぶれバ丈助い暫くと之を止め挾き女兒の所存ゑて一時ゑはやるい道理ぬれ共是只御身と養道と只兩人の上のみゑて世の人ゑ害無れバ然まで急きて面會をるゑも及ぶまじく只捨置難きは養道が惡計とも知ぢ彼ゑ欺かれて非命の死を遂る者を救ふ事是なり然れバ何事も我ゑ任し其詮樣を見給ふ可しとて千般にお菊を諫め諭し夫より平常我家ゑ出はいる乾兒子方の者を集め今回養道が企てたる蓮華往生い愚民を欺く奸計ゑて決して正ーき法力ゑ非ぢ然バ迚確としたる證據も無ゑ叨りゑい手を下されぢと今日まで扣へ居たりしが討らずも惡事の緒を聞出しゑれバ我い云々謀りて容易く養道を生捕彼の爲ゑ非命の死を遂たる我一鄕の人ゑ代りて天罰を蒙らせんゑ御身等參詣人の中ゑ交り我彼蓮華より踊り出たるを見バ速かゑ諸々の惡徒を押へ俱ゑ官府ゑ訴へ出ゑ又雖々は竊ゑ身をやつーて彼等が術を行ふ椽の下ゑ忍び行き場中ゑ於て我痛く叫ぶを聞バ是又手を下して其者共を召捕可し併ーあがら我運命空しく彼等の爲ゑ最期を遂たらんゐは汝等我死骸を申し請宜敷全体を改め我爲ゑ讎を捕へて官ゑ訴へ出よと殘る方無く手配を定め是より先女房お米をして縫ー置たる經帷子を着用なー何やら懷中へ押入れ用意萬端整ひーかバ壹人蓮長寺ゐ赴き養道に面會なー某未だ四十路ゑ過ねど若きより無益の腕立を好み多くの人畜ゑ傷けたると悔嘆き居たるゑ圖らぢも御坊此地ゑ杖を止められ有難き法力もて往生の正覺を得せしめ給ふと聞渴仰ゑ堪ず親戚家族ゑ暇を告げ今日來つて御坊の引導を請參らするおりと若干の金を取出之を養道に與ける日來奸智ゑたけー養道なれ共多九郎の日托がお菊ゑ逢ひ惡事の

緒と嘶ーたりとい少ーも知す且法華丈助い此宗門の信徒ありとい像て明處也ゑ今其丈助が往生を望い益々我爲の好機ありと心中わ悦び異議無く承諾ゑて彼蓮華の元へ到らせ廿餘人の法師其前後を圍繞ーて經文を讀誦ーさらバ往生の望を叶へーめんよ只管題目を唱へたまへと懇ろよ云聞け再回丈助を引て豫て設けある唐銅の蓮華臺よ坐せーめ又々經文を高らかよ讀上ると八葉の蓮華次第〳〵よ丈助を引包みーかバ參詣の老若男女い等ーく題目と唱へ居たりー

が養道い暫く有て最早成佛せられー成と衆僧よ下知を傳へ蓮華を開かせ見つるよ丈助合掌して目を閉端然と座し居たれバ養道い仕濟たりと思ひ參詣の老若よ打向ひ諸人

既よ見らるゝ通り丈助往生の素懷を望みしよ宗祖上人の導きよ依り斯くの如く往生したりと殊勝氣よ打陳べ再び蓮華ー卷戻さんと爲る折しも死しさりと思ひし丈助忽ちよ衝立上り我像てより寶僧の惡罰と知ると雖も未だ親しく手段と知らざれバ今日わざと賺されたる体よなし試みたるよ案に違いを我尻の下より絵を以て覗ふ者あり依てもゑらし來りゐる鏡を以て之を防ぎたるが察そる段汝等非道よも多くの男女を欺き惑る手段を以て無慈の最期を遂さしたるよろ有ん今い速やかよつみの次第と白狀し公けのさバきを受可ーと言ひも敢を跳り出たれバ養道を始め衆多の法師ども事顯はれたりと悟り強く驚き立んと爲るに

腰痿へ走らんとするに足すくみ一言も無く忙然たるを豫て丈助より語られたる乾兒子方の者共贋謀略を見出したり疾く生捕らぜやと罵り立忽ち養道を取つて押へ法衣を剝して高手小手に縛めけるうち其場に有合る法師二十人も皆〳〵一同にいまーめければ心地よーといひつゝ竟に丈助を先に立て代官の廳へ廿餘人を引連訴へ出んとせる處へ乾兒十四五人多九郎の日托に繩打證據の鉾を取持せ引連來りーに出會しゝば丈助い什合せよしと打悅び代官方へ急き行き嗚呼人盛んなる時い天に勝ち天定まつて人に勝と宜なるかな小泉養道惡徒多九郎の輩さーも奸計を以て多くの村翁野孃を欺きつ蓮華臺に座せーめ之を蓮華往生と號けて金銀を掠め取り不義の榮利を目論見たりしが既に〳〵前回にも說たる如く法華丈助と云る俠客の爲に其惡策を見破られ無悪にも縲紲の辱しめを蒙るに至る事豈痛まざらんや哀まざらんや偖も法華丈助い惡黨養道始め蓮長寺の住職日秋其他之に關係したる法師廿人と多九郎等一同と引立つ乾兒等前後に付從ひて幾程も無く一之宮の代官なる菊地折右衛門の屋敷へ詣り著しく一通の願書を捧げ事云々と愬へ出ければ代官い委細を聞き大いに丈助等の手柄を稱美し直ぐに右の科人と白洲に引据一ト通り吟味れ上取敢ず入牢を命じ丈助にい追て何分の沙汰有ば早々罷り出可しと嚴かに言渡し其儘身の暇を與へ去に丈助等い孰れも勇み立て我家へ立戻りしと聞ねし悟て代官菊地折右衛門い翌日養道始め廿餘人の法師原を白洲へ引出し證據の品を以て嚴しく拷問に及びければゝ洗石の養道も包み隱さず事能いず年來の惡事を詳らかに白狀あーければ代官にい此旨領主へ訴へ出則いち領主の差圖に依て養道等一同一の宮に於て斬罪に所せらるゝ赴き申し渡し愈當日にも成けるゝ一町四方に矢來を結撓使兩個養道等へ改めて所刑の旨を申し渡し太刀取役人後へ廻り一時矢來の外俄かに騷がしく壹人の女小吏に就て云入るやう妾い養道といふ二世の約束致したる神名の花

と呼るゝ者なるが彼と別れて久敷相見ざるを嘆き主個の免許を受て遙々尋ね來りたるに思ひきや同人義い法と犯し今日此處に於て御仕置に相成るよし何卒廣大の御慈悲をもつて一ト目ふん逢下されたしと頻に嘆願ゆれども何迎許を可き懇ろに諭して退歸し竟に養道始め殘らず斬罪に成り皆梟木に懸られたるこそ惡の報ひと知れたり恁てお花い養道に面會を免されず剩さへ獄門となりたる淺間敷姿を見て紅涙袖とひたし忽ち緑の黑髪を切て尼法師と成り神名宿に歸り來りて一の宮の顚末を物語り是迄厚き國九郎の情けを謝す養道の爲に生涯出家遁世せん事を請しかば國九郎も哀れに思ひ快く是を免ず襲にお花が養道に廻り逢さる彼毘沙門堂の無住なるを借受け茲をお花の住所として不自由無く一期を送らせたりとか又法華丈助い養道の惡事を見出したる功を賞し領主より夥多の褒美を賜りければ惡く之をお菊に與へ彼が父母に後れ寄邊無く是まで養道の爲に種々艱難の位置に立ち今回多九郎より養道の事を聞と雖も自個の恨を后に して逸早く丈助へ告知せたる心底に報んと改て親子の約束を爲し二三年を過て或豪家へ嫁らせ生涯を氣安送せたりと聞えー

編者曰く此一編い講師伊東潮花が得意の讀物を親しく聞取り筆に寫したる物ありとは既に緒言にも陳置たる通り專ら其脚色の違いん事を畏れ少しも私意を加へず然るに本文中其地名に就て少く疑ひ無き事能いず并を奈良と云ふに先づ關宿の水掛峠又神名宿等是なり余素より彼地に昏く只両総全圖或い富士見十三州繪圖等に據るのみ故有無の判斷に惱み有の儘に書綴置たれ共本年い久き約束を解んの爲め千葉縣下へ漫遊せる等成ば寄くに土人に就て更に之を正す事有可し又本編い都合有て第廿回を以て局を結の計畫あるより充分端しー難き處も有んか是い編者が未熟なるい云を待ず其上止を得ざる事情有事成んとお馴染甲斐に見逃し給てらん事を是請ふ

柳葉亭繁彦

大石良雄七代孫大石多久藏題辭
柳葉亭繁彦著　稲野年恒畫
○赤穂美譚　雪之曙　西洋綴美本全一冊　定價郵税共金九十錢

吉田忠五郎編　寫眞木板肖像入
○新内閣大臣列傳　西洋綴美本全一冊　定價郵税共金五十錢

柳葉亭繁彦著　尾形月耕畫
○愉々快々閨秀奇談　西洋綴美本全一冊　定價金八十錢

春永情史著　落合芳幾畫
○浅草土産　鳴神おてー　西洋綴美本全一冊　定價金一圓二十錢

柳葉亭繁彦著　尾形月耕畫
○名筆土佐繪手帖　和製美本全一冊　定價金五十錢

山東京山著　歌川豐宣畫
○敎草女房形義　和製美本全四冊　定價金一圓七十五錢

歌酩閑士著　歌川繁宣畫
○新田功臣錄　洋製美本全一冊　定價金八十錢

山東京山著　歌川國直畫
○琴聲美人錄　西洋綴美本全一冊　定價金壹圓

柳葉亭繁彦著　歌川國直畫
○土鍋調練爵聞書　洋製美本全一冊　定價金八十錢

柳葉亭繁彦著　歌川國泰畫
○新編競牡丹　洋製美本全一冊　定價金五十錢

柳葉亭繁彦著　歌川國泰畫
○春色行路柳　洋製美本全一冊　定價金六十錢

白頭丸柳魚著　歌川國直畫
○武藏坊辨慶異傳　西洋綴美本全一冊　定價金壹圓

柳葉亭繁彦著　應齋年方畫
○勇立春若駒　和製美本全一冊　定價金四十錢

爲永春水著　尾形耕作畫
○明烏後の正夢　洋製美本全一冊　定價金壹圓